

野鳥たより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 111 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成10年3月21日

ア ト リ



1994. 1. 25

撮影者 早坂泰夫

〒004-0074 札幌市厚別区厚別北4条2丁目6-5



もくじ

ヨーロッパトウネン観察報告	広川 淳子	2
新年野鳥講演会報告		3
凧と熱帯鳥 (東京～ハワイ～サンフランシスコ航路の鳥たち)		
	岩瀬 操	4
オオタカの分布と生態調査記録	山田 良造	10
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		13
鳥民だより		14

ヨーロッパトウネン観察報告

広川 淳子



ヨーロッパトウネン 1997. 9. 13 新城 久

日本全土でもこれまでにまれにしか記録されていないヨーロッパトウネンが、1997年秋に石狩川沿いで観察され、写真にも撮影されました。正式なものとして認められそうな記録は北海道ではおそらく初めてと思われるので報告します。なお、図鑑によってはニシトウネンという名にしているものもあり、むしろそちらの方が多いのですが、日本鳥類学会が最近公表した日本産鳥類リスト(日本鳥学会誌46巻1号、1997年)に従い、ヨーロッパトウネンとします。

観察場所は石狩川にかかる札幌大橋から数百m下流右岸の排泥地です。地名としては当別町美登江になります。河川敷を堤で区切り、石狩川浚渫の泥水をためる排泥地がいくつか作られています。そのうちの1ヶ所には石狩

川から直接太いパイプが導かれており、泥水が吹き込まれていることが多かったのですが、泥水と一緒に鳥の餌となるミミズのようなものも流し込まれるのでしょうか、1997年秋には随分といろいろなシギ・チドリ仲間がそこで見られました。メダイチドリ、ダイゼン、ムナグロ、トウネン、ハマシギ、ツルシギ、オグロシギ、アオアシシギ、オオソリハシシギなど、そして大きなホウロクシギも餌を探していました。

9月9日の午後、十数羽のシギの群れが仲良く餌を探っているのを眺めていました。みんな冬羽でしたが、その中に1羽だけ少し違う感じの鳥がいることに気がつきました。「あっ、これはトウネン

とは違う鳥だ。」と思い、じっくり観察しました。トウネン、ハマシギと一緒にしたので比較がしやすく、違いがよくわかりました。全体に白っぽい。嘴が細い。眉斑がトウネンとは違う。羽のパターンがトウネンとは全く違い、ハマシギに似ている。ヒメハマシギ? いやちよつと違う。ヨーロッパトウネン? うん、これかもしれない。というところまでいったのですが、はっきり確認できないまま夕暮れになってしまいました。

翌日からも同じ場所に行き、同じ鳥がいるのを見ました。一つ一つの特徴をあらためて確認しているうちに、これはヨーロッパトウネンに違いないと思うようになりました。自分ではある程度の自信があったのですが、他の人による確認もほしいし、また珍しい鳥であれば他の

人にも見てもらいたいという気持ちもあり、何人かの人たちに連絡したところ9月13日、14日の週末には愛護会に属する方々など数人が集まり、一緒に見ることができました。またアマチュア写真家の新城久さんも来て下さり、何枚かの写真を撮ることができました。一緒に見た人たちともヨーロッパトウネンに違いないということになったのですが、念には念を入れ、後日新城さんが撮られた写真をこの種の鳥の識別に詳しい山階鳥類研究所の茂田良光さんに送り鑑定を依頼したところ、間違いなくヨーロッパトウネンであり、幼羽から第1回冬羽に換羽中のものという返事をいただきました。

そのヨーロッパトウネンは14日までの1週間足らずしかいなかったのですが、その間じっくりと観察できました。あれからどこへ行ったのでしょうか。一緒にいたトウネンやハマシギたちと南に飛んでいったのでしょうか。日本のどこかに立ち寄り、またどなたかに見られたり、写真を撮られたりしたのではないかと勝手に想像しています。

ヨーロッパトウネンは日本では1980年9月に神奈川県相模川の河口で、成鳥冬羽1羽が確認されたのが初記録となっています(野鳥46巻、5号、1981年)、これについてはトウネン成鳥冬羽の誤認ではないかという報告もあります(バーダー誌、1994年10月号、文一総合出版)。でも、その後日本各地でいくつかの確認記録がありますから、少数とはいえ日本に飛来することがあるのは確かなようです。繁殖地は北極圏のツンドラで、越冬地はインド、中近東、アフリカ大陸あたりですから(Shorebirds、Hayman他著、Christopher Helm、1986年)、

通常の渡りのコースに日本は含まれません。ですから日本に飛来するものは迷鳥ということになるのですが、トウネンと繁殖地が一部重複していますから、何かの加減でトウネンと一緒に渡って日本に立ち寄り寄る個体もいるのではないかと考えています。

北海道では1995年に網走の能取湖卯原内で観察されたという報告があります(日本野鳥の会北見支部報、No.98、1995年)。愛護会の樋口孝城さんが北見支部(現オホーツク支部)の川崎康弘さんに詳細を聞いて下さったのですが、5月21日に川崎さんが成鳥夏羽1羽を、5月23日に川崎さんと舟生憲幸さんがそれぞれ独立に、成鳥冬羽から夏羽へ換羽中の個体1羽ずつを観察されたそうです。ただ、写真等の具体的な証拠が得られていないため、北見支部では参考記録としてとどめているようです。希少種や識別困難種については、確実な記録として残すためには厳密な基準が必要なのですが、今回のヨーロッパトウネンについては私以外にも複数の人による観察、認定された写真の存在ということで、この報告により北海道初の正式記録として認められるのではないかと考えております。

初めに書いたように、ヨーロッパトウネンは全国的にも珍しい鳥なのですが、実際に飛来している数は観察された数よりも多いと思います。特に冬羽個体についてはトウネンの群れに紛れて見逃されている可能性があります。今後も注意して見ていこうと思っていますし、また、夏羽個体にも出会えることを楽しみにしています。

〒002-8029 札幌市北区篠路9条2丁目11-6

新年野鳥講演会「シマアオジの話」が開催されました

講師：小山心平さん

平成10年1月10日、札幌市女性センターにおいて、小山心平さんを講師に「シマアオジの話」の講演会が開催されました。調査をされていた当時のなつかしい方々をご紹介のあと、多くのデータの蓄積からシマアオジがアジア大陸からどのようなルートを経て北海道へ渡ってくるのか地図で示して頂きました。またシマアオジの繁殖行動を詳しい図で解説され、その繁殖地に生えている植物のスライドもあり植生環境の保護も重要との事でした。

【参加者】中正憲信・弘子、栗林宏三、赤石誠二、高辻弘美、濱本真琴、大町欽子、小堀煌治、山田良造、三船幸子、志田博明・政子、森田新一郎、板田孝弘、竹中昭雄、松原寛直・敏子、手賀節子、沢部 勝、道場 優、

横井澄子、白澤昌彦、浜田 強、佐々木啓子、鎌田直実、樋口孝城・陽子、品田紗智子、佐藤ひろみ、井上公雄、岡部誠一・美恵子、溝口恵美、栗沢好恵、戸津高保、野坂英三、坂本登紀子、犬飼 弘、蒲澤鉄太郎・則子、小山内さと子、石橋孝継、尾田和雄、道川富美子、山崎カツエ、太丸リツ、羽田恭子、佐藤 勇、佐藤正秀、広川淳子、渋谷信六・弘子、住田真樹子、橋本雅子、山本昌子、千葉正一、温井日出夫・潤子、元谷千鶴子、猿子正彦、渡邊智子、広木朋子、清水朋子 以上63名

凧 と 熱 帯 鳥

東京～ハワイ～サンフランシスコ航路の鳥たち

岩 瀬 操

1 1992年5月24日、海上保安大学の練習船「こじま」は東京港晴海埠頭を離れ、ハワイのホノルルへ向け日本を後にしたのです。

「こじま」には、実習生と乗組員が100余人乗船しています。総トン数は1,100トン、長さ70メートル、幅10メートル、一部5階建てです。広い様に思えますが、全ての空間が居室では無く、機関室、通信室、操舵室、倉庫、食料貯蔵庫、賄い室、食堂（兼教室等）、トイレ、風呂等があります。船の底の方には、燃料タンクや真水タンクがあり、この閉じ込められた空間に100余人が乗船し、約3か月の間、運命を共にするのです。（海上保安大学は、海上保安庁の幹部職員を養成するための教育機関で広島県呉市にあり、教育期間は4年半、全寮制で、入学と同時に国家公務員となり給与が出ます。）

呉を出航し、東京～ホノルル～サンフランシスコ～カフルイ～東京を経て呉に戻る約3ヶ月の遠洋航海です。

私はこの船の機関長として、船齢27年の老朽船のたった一台しかない老朽主機関が壊れないように面倒をみながら戻って来るという厄介な仕事を仰せつかったのです。この遠洋航海が無事終われば、国内の主要港を巡る航海を残すのみです。「こじま」は年が明ければ引退することになっていました。

本船（船乗りは自分が乗船している船のことをこのように呼びます。）は、野島崎沖で針路を北東に取りハワイに向いました。大圏コース（地球儀上では最短コースを言い、海図上に示すと直線ではなく弧を描きます。）で2週間の航海のはじまりです。約2時間もするとTVは受信出来なくなり、翌日にはラジオも聞き取りにくくなりました。沿岸の汚れた海は、どんどん透明度が増していき、黒潮に入ると藍色に変わります。更に進み、黒潮を抜けると藍色が紫を帯びてきます。水面の影を見ていると、底の方へ吸い込まれるように続き小さな点になってしまいます。

伊豆大島と野島崎の間の海は、ウミツバメの仲間がたくさん飛び回っていました。コシジロウミツバメとオーストンウミツバメでした。せわしなく羽ばたいたかと思うと、グライダーの様に滑空します。波間に消えたり現れたり、大変に速いので双眼鏡で追い掛けるのが精一杯で、そのうえ100メートル位までしか近づ

いてくれないので識別が大変です。

2 この度の航海には、お医者さんが乗り組んでいます。20歳代の若い女医さんが乗船されるとのことで、出航前から話題の中心になっていました。実習生に女性が一人いますから、100余人の中で女性が二人というわけです。女性は精神的に大変強い人が多く、男の中にただ一人だけであっても大丈夫ですが、男が女性の中にただ一人という環境に置かれると精神的にまいってしまうと聞いていましたので、女性ですから大丈夫とと思っていました。東京を出航し浦賀水道あたりまではお姿を拝見したのですが、夕食時、サロン（士官室）で姿を見なかったので主計長に聞くと、「船酔いでベットです。」とのことでした。この日から女医先生のお姿をハワイ入港まで見ることはありませんでした。約2週間というもの、食べ物は臭いをかいただけで気分が悪くなり食べられなかったそうです。自ら点滴をしながら生きながらえていたそうです。私も若かりしころ、本船での実習航海で船酔いの苦しさを十分に体験しました。

3 出航して二日目の26日朝（N34-30、E149）0830LST*ころシロハラミズナギドリ（翼下面が白くハの字の模様が顕著）を初見、以後ホノルル沖まで毎日見ることができました。

（*）（N34-30、E149）0830LST

北緯34度30分、東経149度、8時30分地方標準時

4 27日朝（N35、E156-50）0830LSTころ、コアホウドリを初見、船尾方向約1,000メートル付近を2羽、滑空しながら本船を追い掛ける様に飛んでいるのを、波の間に間に以後3日間毎日見ることができました。時にはすぐ近くまで飛んできましたが、グライダーのように滑空したままで、羽ばたくのを見ませんでした。風が右後方から10メートル前後吹いており、5～6メートルの波浪になっていました。この時、本船は10度前後のローリング及びピッチングを繰り返していました。

この日、同じ頃クロアシアホウドリも初見、コアホウドリと同じ様な飛び方をしていました。以後7日間毎日見ることができました。

更に、波の間を探すと、オオミズナギドリより少し小さく、体全体が黒く、翼下面にハの字が見えるハイイロミズナギドリと覚しいのが、滑空していました。



コアホウドリ

更にシルエットから、ミズナギドリの仲間とおぼしき鳥が、波の間に間に見え隠れしているのが散見されるのですが、あまりにも遠いため種類を特定することはできませんでした。

- 5 29日夕方 (N32-30, E171) 1730LSTころ、後部デッキのボラード (係留時にロープを巻き付ける物) に腰を下ろし、夕食後のひといきを空や海を眺めながらのんびりとしていました。でもいつの間にか「鳥」を探しているのです。

オオミズナギドリより少し小さく腹部、翼下面は白っぽく見え、翼上面は後縁が白っぽく (翼の先端部は黒っぽい) 尾が楔状になっているミナミオナガミズナギドリとおぼしい鳥を視認しました。

毎晩、満天の星空を期待してデッキに出てみるも全天の三分の一から半分位の星空しか見ることができず、残りの空は雲に覆われていました。航海科職員から満天の星空を見たときと聞くと悔しい思いをしました。例えば満天の星空でなくとも、視力に見合う沢山の星があるのです。星空にはロマンがあります。しかし、真っ暗な海は不気味さが漂い、なにやら怪しげな物がそこかしこから出現しそうです。

上空に瞬きながら移動する光点を見つけました。良く見ると一個だけでなく、一定の間隔をおいて幾つかがつながっているように見えました。船尾方向から船首方向へ移動していきます。日本からハワイへ向かう飛行機のようなです。今から数時間前に成田を出発し明日の朝ホノルル郊外の飛行場に到着のでしょう。東京港を出て五日目です。ホノルルまで残り1週間。今度ハワイへ行くときは飛行機にしようと思います。

- 6 30日昼 (N30-30, E175-50)

オオシロハラミズナギドリとおぼしいミズナギドリの仲間を認めました。後頭部下に白い帯、翼下面が白く翼角付近に黒い線 (への字に見える) があり、翼上面は黒っぽいのが背から雨覆にかけて白っぽく見えました。

30日夕方、全体が茶褐色で足までが赤いカツオドリに似たのが、後部マスト頂部に止まっていた。カツオドリは胸から腹部にかけて白色が多いのですが、これは茶褐色でした。アカアシカツオドリの褐色型と判断しました。

31日には東経180度 (日付変更線) を越え西半球に入域することが判明しました。翌日になっても再び同じ31日なのです。5月31日に生まれた人は誕生日が二日続くことになります。初めの31日は、そのまま「31日」と呼び、二回目の31日は「二日目の31日」と呼びました。

二日目の31日 (N29-45, W177) の夕方、1630LST / 1400JST (日本標準時) にハワイシロハラミズナギドリを初認、嘴が黒色、額部が白色、上面が黒色、下面が白色で、翼周囲又は翼角付近に黒色の「へ」の字が見えました。

6月3日 (N23-31, W160-57) 夕方 (1745LST) 入浴中に舷窓から外を眺めていたら、白っぽい鳥が横切りました。急いで舷窓から首を出して見るとアジサシのような体型で全体が白色の様に見えました。「フィールドガイド日本の野鳥 (高野伸二著)」P106、107のシロアジサシに似ていました。

- 7 6月5日0300LSTころ、遂にホノルル港沖15海里 (27.8km) に到着しました。暗い中にもオアフ島のシルエットが見え、明かりも見えました。明るくなると、シロハラミズナギドリ、オオシロハラミズナギドリ、ハワイシロハラミズナギドリらしい鳥が多数飛んでいるのが目に入るようになり、島に近づいていくとますます増えてきました。ホノルル沖10海里 (18.5km) 付近で急激に少なくなり7~8海里沖では全く見られなくなってしまいました。以後ホノルルを出航するまで港付近で海鳥を見ることは出来ませんでした。

1970年5月に本船で訪れたときは、大阪商船の貨客船とアロハタワー直下の岸壁に並んで接岸しましたが、この度係船したのは、アロハタワーが目の前に見える、ホノルル市官庁街の近くにある米国沿岸警備隊専用岸壁でした。アロハタワーは、昭和の初めまで日本からの移民船が接岸していたとのこと。現在はクルーズ船専用岸壁として使われています。

- 8 ハワイ諸島には、在来種と移入種とがありますが、在来種は大変少なくなり絶滅の危機にあります。我々のような旅行者にとって野外で観察することは非常に困難ですし、ホノルル動物園でもクロエリセイタカシギ、アカハワイミツスイ、ハワイガン、アメリカオオバンの4種しか、見られませんでした。

港からアラモアナ公園を経由し、ワイキキ、カピオラニ公園と、鳥を探して何度も歩いて往復しました。

ハナウマ湾から東海岸沿いにカフク岬へ、更にパール市から内陸を縦断し北部のワイルア湾（ワイメア溪谷）と行きました。在来種が生息していると言われる山間部に入る事は、残念ながら出来ませんでしたので、在来種を見ることはかないませんでした。

9 公園や空き地等で目についた、スズメに似ているが、頬の黒斑が無いイエスズメはスズメやニューナイスズメより地味で♂♀の別がありました。木の梢で目についた、メキシコマシコは、雌雄ともウリボウに似た模様で、雄は頭部と喉・胸が少し赤みを帯びていました。体は薄い茶褐色です。

アラモアナ公園でみるが多かったドバト、木々の間にマネシツグミ、地面を歩き回っていたカノコバト、アラモアナショッピングセンター内で、人の足の間をウロウロ歩き回りながらこぼれた食べ物をついばんでいたチョウショウバト、雨覆に丸く白い斑があり、蝶がひらひらと飛んでいる様に見える、どこでも見ることが出来たやかましい声のインドハッカ、体全体が黒くさらに頭部が真っ黒、下腹部が真っ赤なシリアカヒヨドリ、胸から腹部が白っぽく、下腹部が人參色、背が黒く、黒い尖った冠羽を頂く真っ黒な頭のコウラウン、カトリックの枢機卿が深紅の衣と帽子を身につけていることから名前が付いた、ショウジョウコウカンチョウ、真っ赤なとさか、白い胸に赤いネクタイの、コウカンチョウ、真っ赤な頭に白い首輪、背が黒く胸から腹部は白、嘴が黄色のキバシコウカンチョウ、ホノルル動物園内で給餌箱に群がっていたブンチョウと何れも南北米大陸、アジア、アフリカ等から持ち込まれた鳥たちです。

日本から持ち込まれたメジロ、ウグイスも目につく鳥です。

ダイヤモンドヘッドへは、外輪山に設けられた、歩道・車道の別のないトンネルを抜けクレーター内へ入り、陸軍基地の横を通り、駐車場の横から登山道を行います。緩い登りが10分ほど続き、その後つづら折の山道を20~30分喘ぎながら登ると、小さなトンネルに入ります。全く照明が無く真っ暗闇の中を、手さぐりですすみ、何十分もかかった様な気がしました。上の方から僅かな光が射し、らせん状の鉄ばし道を登りきると、トーチカの様な所へでました。まばゆい光の中を更に頂上をめざし、程なく頂上のダイヤモンドヘッドにつきました。ダイヤモンドヘッドからの眺めは「絶景かな絶景かな」で眼下にホノルルの街が、そしてコバルトブルーの海がどこまでも続いていました。

気がつくとも眼前に、アオツラカツオドリ1羽が風に乗り羽ばたきもせず、止まっているようにみえました。少し離れた所を全身真っ白なシロアジサシが2羽通り

過ぎて行き、下の方から時々小鳥の声がかすかに聞こえて来ました。

下山途中に、木々の梢の間で見え隠れしている小鳥は、オナガカエデチョウ、ホオアカカエデチョウのよ



ハワイガン

うに見えました。登りでは気付きませんでしたが、下りは余裕があったようです。

10 25年程前に実習生で来たときは、1ドル360円の時代でした。ホノルル市内の銀行ではレートが400円で、しかも壱万円札でなければ交換してくれませんでした。この度は千円札でも交換してくれました。おまけにレートは100円余です。食事や買い物をして感じたのは1ドルが200円位で丁度釣り合うのかなと思いました。

ホノルル滞りも終わり、サンフランシスコまで7日間の航海です。サンドアイランドを航下したところから、動揺が大きくなり気分が良くありませんでした。海上は白波ばかりで「鳥」を視認できませんでした。この状態がサンフランシスコ入港前日まで続いたのです。この航海で驚いたことは、ホノルルまで自ら点滴をしながら生き長らえてきた「先生」が、楽しそうにかつ平然と食事をされていたことでした。

11 19日（JST20日）早朝、サンフランシスコ湾口まで15から5海里付近まで、ウミガラスがうじゃうじゃといるのです。霧が出ていましたので見える範囲は船から2~3km先まででしたが数万羽はいたようです。ゴールデンゲイトブリッジは橋脚が見えるだけで上部は霧に隠れていました。ウミガラスはいつの間にか見えなくなっていました。橋の下を通過、アルカトラズ島を左に見ながら、サンフランシスコ滞在中に係船する45番埠頭へ向かいました。

「入港用意元え」の船内放送でデッキ上へ出てみましたら、観光の名所、フィッシャーマンズワーフのど真ん中でした。目の前にアルカトラズ島、西にはゴールデンゲイトブリッジ、東にはトレジャー島に架かる

ベイブリッジが望めました。

サンフランシスコはハチドリが見られる街ですので、期待していました。本船の乗組員と実習生には、ハチドリについて情報収集を依頼しました。(この頃には、「鳥の機関長」として船内で有名人になっていました。)毎日、どこそこの花壇でそれらしいのを見たと言う情報が集まりはじめましたが、私は一向にお目にかかりませんでした。

- 12 ナパバレーへの道すがらアメリカガラス、ヒメコンドルを車窓から眺めることが出来ました。ナパバレーと言っても、山間のような土地でなく、日本ならさしずめ「○○平野」と呼ばれるようなとても広い所です。

三箇所のワイナリーを訪問し、ワインを試飲させてもらいました。白はなかなかの味でしたが、赤は好きになれませんでした。少し気分が良くなったところで、色とりどりの美しい花々の花壇で「ハチドリ」を探してうろうろしました。とある花にそれらしいのがありますが、20メートル程離れていましたので、鳥なのか蛾なのか判別できませんでした。(瀬戸内海の小豆島で勤務していたときに、ハチドリに良く似た蛾をみました。)この時かんじんな双眼鏡は背中のバッグの中、取り出している間に「ハチドリ?」はいなくなってしまうました。“双眼鏡は常に使える状態”悔やんでも後の祭りです。それからしばらく必死になって捜したのですが、発見できませんでした。

帰路、ソーサリトのレストランでサンフランシスコ市街の夕焼けを眺め、ワイングラスを傾けながらのディナーは至福の一時でした。

- 13 サンフランシスコ湾を眺めていると、カッシュクベリカンが5~6羽の単縦陣でゴールデンゲイトブリッジ方面へ飛行していました。注意していましたが反対方向へ飛んでいくのは見ませんでした。いつ、どういう経路を戻るか気になるところです。

第45埠頭付近にはセグロカモメが特に多く湾内のどこにでもおり、上屋の屋上には雛を見ることができました。セグロカモメより少し小さく尾に黒い帯、足が黒で体全体濃い灰色を帯び、嘴は赤く先端部が黒っぽいオグロカモメ。アザラシかアシカの様な海獣が頭だけを出してこちらをじっと見ていることがありました。第39と41埠頭との間にはトドが数十頭昼寝をしているところがありました。

- 14 海沿いの道をたどりゴールデンゲイトブリッジまで出かけることにしました。ホートメイソンの森、ゴールデンゲイト国立レクリエーション地区の海岸を経て、フォートポイントに至る4時間程の散策です。ケーブルカーのターンテーブル付近から国立海洋博物館付近の芝に、全身が光沢のある黒、丸い目の周りに金色の

リングがあり、頭から背にかけて紫色の金属光沢のあるムクドリ位の大きさ、頭から嘴への形状はハシボソガラスに似ているが嘴は細いのでテリムクドリモドキの♂と思われました。

近くに同じくらいの大きさに、ただ黒いだけのが居て、図鑑を調べると判断しました。フォートメイソンの森の中の道を歩いていると、下草のない地面の上をホオジロに似た小鳥が餌をついばんでいました。良く見ると目先(目と嘴の間)に黄色があり、頭部に黒と白の線が前から後ろへ見えまして、ノドジロシトドと思いました。

ツグミに似ており、腹部が赤茶色を帯びたのがいましたが、直ぐに隠れてしまい判断できませんでした。

マリナパークの芝上にホオジロに似た小鳥が何羽か見えるのですが、頭部から背と胸に赤茶色がかつたもの、茶褐色で目立たないものなどいて、判断できませんでした。

ゴールデンゲイト国立レクリエーションエリアの海岸付近で、嘴の付け根が青色でその続きが黄色のウを見つめました。図鑑によるとアオノドヒメウと思われました。

アジサシの仲間では頭部が黒、嘴が赤く先が黒くなっている、足が赤のアジサシをみました。翼端は黒く帯状に縁取られており、盛んに海面に飛び込んでいました。

アジサシとは少し違うアジサシを認めました。嘴が赤く、足は赤、翼端は筋状に黒くなっていました。翼端の黒く見える部分がアジサシよりも細いのでキョクアジサシではないかと思います。

歩いては立ち止まり望遠鏡・双眼鏡を覗きながら、なんとかフォートポイントにたどり着きました。

路面電車に似せた観光バスが来ていましたが、日本人らしき人はみませんでした。ここの見学を済ませ、橋脚の基部へ行ってみました。サンフランシスコを訪れる日本人は大変多いと思いますが、ゴールデンゲイトブリッジの橋脚に触れた人は少ないでしょう。私はその数少ない一人になったのです。

- 15 サンフランシスコの滞在も終わり次の寄航地、ハワイのマウイ島にあるカフルイへ向け6月25日午後第45埠頭を離れました。

アルカトラズ島やビル群を船尾に眺めゴールデンゲイトブリッジの下を通過しました。プレシディオの森が霞むころ海の上にカッシュクベリカン、オロロン鳥、カモメの仲間が数えきれない程いました。時々アシカも頭を出していましたが、そのうちに皆いなくなってしまうました。

サンフランシスコの西方約50kmにあるファラルン島

付近を、沈む夕日に向かって静かな海を進んでいました。水平線上に群れをなして飛んでいる鳥がいましたが、逆光でしたのでシルエットと飛び方からシギの仲間だろうと思いました。

日が沈み船首方向の西の空があかね色に染まり、頭上は青から群青へ、そして後方には闇が迫っていました。星は瞬きはじめ、西の空はうっすらと青い空が残るだけとなりました。その青い空も小さくなり、いつの間にか空は星と闇に覆われてしまいました。

その後、鳥を見ることは無く、マウイ島のカフルイに入港する2~3日前にクロアシアホウドリを2羽見ただけでした。

16 7月2日朝カフルイ港に入りました。椰子の木や名も知らぬ大きな木が、そこかしこに散見される、のどかな街です。港外から棧橋までの間にも、水鳥は全く見当たりませんでした。

街中では、イエスズメ、メキシコマシコ、インドハッカ、チョウショウバト、ドバト、コウカンチョウの仲間を見かけました。郊外の牧場でウシの周囲にはアマサギが多くいました。ハレアカラ火山にハワイガン、ベニハワイミツスイが居ると聞いたので、期待してでかけました。管理事務所では、ベニハワイミツスイについてはここ何年も目撃されていないこと、ハワイガンは火口内で棲息しているが、数が減っているのを唯一棲息している火口内へ降りても見つけるのは難しい、とのことでした。

17 港の近くにカナハポンドという、クロエリセイタカシギの保護区があります。ここは浅い池の周囲を草地と林が囲んだ場所で保護区全体を金網で囲み、動物が入り込まないようにしてあります。

観察者は、常時閉鎖されている出入口を開閉し、保護区内に入れるようになっています。種の保護指定のみでなく、採餌や繁殖に必要な環境もきめ細かく保護・整備されていました。

水面と草地に成鳥50~60羽、水際に雛鳥1羽を認めました。雛鳥の近くにいた親鳥が私の方に2~3歩近づき、クワッ、クワッと鳴き片足で立ち、じっとこちらを見ていました。私は親鳥に威嚇されているのだと気づき、10歩程後退しました。親鳥は何事も無かったかのごとく、雛鳥の周りで地面をつついていました。

この池で、ゴイサギ、ハワイマガモ、アメリカオオバンも見ることが出来ました。

イアオニードルでは、オアフ島で見た外来種に出会いましたが、在来種には会えませんでした。ククイナツツの木が多数あり、ナツツも沢山落ちていましたので、拾って帰り磨くことにしました。お土産屋さんで売っているナツツは、綺麗に磨かれキーホルダーやレイに

加工されたものです。実の周りは黒や灰色の固い石灰質で覆われていますので、これを「金工用やすり」で削りおとし目の細かいやすりに取り換えながら形を整えていき、次に液体研磨剤を布に付け細かい傷を取り除きます。仕上げは柔らかい布で光沢をだします。

一個仕上げるのに4~5時間は掛かります。乗組員の中に何年も掛かって暖簾を作った人がいたそうです。

18 7月7日カフルイを出港、東京へ向かいました。今航海では、日付変更線を通るので、無くなる日ができます。港外に出てしばらくすると、コアホウドリ、クロアシアホウドリが船尾方向に2~3羽見えていました。オアフ島の南を航過している頃、シロハラミズナギドリを多数認めました。

カウアイ島の南を航過し、ハワイ諸島の北西に連なる珊瑚礁からなる島々の南側を通ります。この付近は鳥の多い海域ですので期待しています。9日昼ごろに、誰かが船尾に凧(ゲイラカイト)を揚げていました。釣り竿のリールを使い、仕掛けに代わりに凧を着けていたのです。40~50メートルは揚がっていました。翌日の朝7時にはもうありましたので、昨夜からそのままになっていたようです。

朝食後のひとときを過ごしていた時、ふと気付くと凧の近くに熱帯鳥みたいな鳥が3羽飛んでいるのです。直ぐに首から下げた双眼鏡を手に取り覗きました。嘴が赤、体は白く細い長い尾があり、その尾が赤いのです。アカオネツタイチョウです。ワクワクしながら双眼鏡をずっと覗いていました。カメラを取りに行きたい衝動を抑えながら、観察に専念しました。10~15分位たったころ北のほうへ去っていきました。丁度午前8時少し前でした。

昼食後に後部デッキに行くと、「先ほど、喉が赤黒く大きな鳥が1羽、凧の近くにいました」と実習生が教えてくれました。この海域で喉の赤い鳥はゲンカンドリであろうと思います。

凧にネツタイチョウやゲンカンドリが興味を示しているのです。非番の時は船尾が探鳥待機の場所になりそうです。

19 11日7時過ぎには望遠レンズをセットしたカメラを三脚に取り付け、現れるのを待ちました。今日の本船の位置はレイサン島の南側を航過しています。明日は日付変更線を越えて東に入るでしょう。

水平線や周りを捜すのですが、ネツタイチョウは見当たりません。今日はこないのかな、と諦めかかっていましたら、いつの間にか凧の周りに5羽もいるのです。撮影しようとしたら、天頂に近くて三脚が邪魔になり使えないのです。三脚からカメラを外したいのですが、焦っているせいか、なかなか外せませんでした

が、何とか写しました。10分程で北の方へ飛び去っていききました。14日まで、朝の8時前から9時ころまでに2～3羽が現れましたが、15日以後は見る事ができませんでした。

20 10日と11日の夕方に、ナンヨウマミジロアジサシを多数見ました。嘴が黒く短い、足が黒く、胸から腹が白く、頭が黒くて翼上面より濃く、背中が薄く見えませんでした。

一週間ほど、朝から夕方までほとんどの時間をデッキ上で過ごしているの、真っ黒に日焼けしてしまいました。実習生で毎日日光浴をしている者は、前と後は、白く見える歯と目で区別できるだけという者もいました。

11日の夕方、翌日には日付変更線を越え東半球に戻ることが確定しました。12日は無く、13日になることになりました。往路で同じ日が二日続けてありましたが、復路で調整されてしまいました。東へ東へと航海を続け日本に戻ったらどうなるのでしょうか。日本へ戻ったら一日多いのでしょうか。

21 ハワイ列島の西端にミッドウェー島があります。この島の近くで日本帝国海軍と米海軍が戦いを繰り広げ、多くの艦船・航空機が海中に没し、その結果多数の将兵の命が失われました。特に帝国海軍は壊滅的損害を被りました。我々は往路で、両国英霊への慰霊祭を執り行いました。復路では、慰霊の日禱をしました。大戦後50年余の間に、世界の各地で戦争があり多くの人達が亡くなったり、傷ついています。今でも人間の身勝手さのため、人だけでなくたくさんの動物が死んでいます。

22 11日から3日間後部マストに、アカアシカツオドリが逗留していました。全体は褐色がかっており、上嘴は少し青みを帯び、下嘴は少し肌色、足は綺麗な肌色でした。飛び魚が飛ぶと、それを目掛けてダイビングの様に飛んでいきます。4～5回に1回位は捕食に成功していたようです。

15日の朝食後、くじらが潮を噴いているのを見つけましたが、遠いため種類を特定できませんでした。水平線の近くに、群れている鳥が居るのですが、ミズナギドリの仲間らしいことしか分かりません。幾つかの群れの上空にゲンカンドリらしいのが何羽か旋回していますが、特定できませんでした。

16日朝、シャチが4～5頭の群れで居るのを見つけました。体の白黒の模様、海面に突き出た背びれというように、遠方でも識別可能です。

この時以降は、日本に近づいたためか、鳥をほとんど見なくなってしまいました。ときどき、クロアシアホウドリかコアホウドリを見かけるだけです。更に日

本に近づくと海の色が藍色から緑が濃くなってきました。伊豆大島付近になると、海の汚染がひどくなってきます。日本沿岸はゴミだらけです。東京湾内は、汚染されたドブのようなものです。これでも以前に比べれば良くなっているようです。「水に流す」と言う言葉がありますが、行き着く先は「海」です。

今航海で視認した鳥リスト

コシジロウミツバメ、オーストンウミツバメ、シロハラミズナギドリ、ハイイロミズナギドリ、ミナミオナガミズナギドリ、オオシロハラミズナギドリ、ハワイシロハラミズナギドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリ、アカアシカツオドリ、アオツラカツオドリ、カッシュクベリカン、シロアジサシ、ナンヨウマミジロアジサシ、アカオネツタイチョウ、ウミガラス、セグロカモメ、オグロカモメ、アオノドヒメウ、クロエリセイタカシギ、ハワイマガモ、ゴイサギ、アマサギ、アメリカオオバン、ウグイス、メジロ、イエスズメ、メキシコマシコ、マネツグミ、カノコバト、チョウショウバト、カバイロハッカ、シリアカヒヨドリ、コウラウン、ショウジョウコウカンチョウ、コウカンチョウ、キバシコウカンチョウ、オナガカエデチョウ、ホオコウチョウ、ブンチョウ、アメリカガラス、ヒメコンドル、テリムクドリモドキ、ノドジロントド

ホノルル動物園

クロエリセイタカシギ、アカハワイミツスイ、ハワイガン、アメリカオオバン

参考文献

- 世界鳥類和名辞典 (大学書林)
HAWAII' S BIRDS (Hawaii Audubon Society)
The Golden Guide Series 「BIRDS OF NORTH AMERICA」
SEABIRDS (Peter Harrison)
PETERSON FIELD GUIDES Westren Birds
PETERSON FIELD GUIDES Eastern Birds
フィールドガイド 日本の野鳥 (高野伸二著)
コンサイス 鳥名辞典 (三省堂) ほか
〒220-0032 横浜市西区老松町32 老松住宅RA-41
(この原稿はすでに日本野鳥の会小樽支部報「あおばと」47号に掲載されています。)

オオタカの分布と生態調査記録

山田良造

1995年日本野鳥の会研究センターから、オオタカの分布と生態についてアンケートの依頼があった。1993年から1995年までの3年間の生態調査である。調査の主体は「日本野鳥の会全国支部、日本オオタカネットワーク」の会員有志、さらには日本各地の猛禽類に関心を持っている研究者たちであった。

私はちょうど札幌市手稲区前田防風林で営巣中のオオタカを観察していたところであったので、引受けることにした。この記録はそのときの断片的な記録を元にまとめたものです。

1 オオタカの観察記録

1994年、札幌市手稲区前田防風林にオオタカが営巣したという情報を入手していたが、私の観察は1995年だけで、残念ながら1996年以降、オオタカの営巣地北側で開発工事が始まり、オオタカは営巣していない。

(1) 1995年4月21日 14時00分、くもり

前田防風林は、西から東に幅100mの広葉樹が6kmぐらい続く緑地帯で、周辺は牧草地、畑、それに石狩湾新港用地である。営巣地はヤチダモ、ニセアカシア、シラカンバ等の広葉樹林で、地表はクマイザサが密生していた。

営巣木ヤチダモの樹高は13mぐらいで、樹高6mぐらいから4本の枝分れとなっていて、この枝分れを利用して、枯れた小枝を積み上げた直径1mぐらいのオオタカの巣があった。防風林沿いに道路があり、営巣木は道路から30mぐらいと近い。道路に駐車した車両の中から観察したが、巣の上にオオタカの頭が見え抱卵中であった。

(2) 4月24日 13時00分、晴れ

営巣木に見える道路に他の車両が駐車していたことから、車両の中からオオタカの抱卵を確認して通過した。

(3) 4月25日 8時00分、くもり

オオタカは太陽に顔をむけて抱卵していた。

(4) 4月27日 9時30分、くもり

車両から抱卵を確認したが、周囲は裸の木立ちで巣は丸見えであった。

(5) 5月5日 13時00分から14時00分、晴れ

巣まで40m手前にブラインドを張り観察した。周辺の木はまだ殆んど葉をつけていない。抱卵中のオオタカ♀は体を浮かせてくちばしで卵をまわしている。

14時00分、タラノキの新芽を摘む山菜採りの人が歩いてきたことから、観察を中止して離れた。



巣立ちしたヒナ 1995. 7. 4

(6) 5月11日 13時00分から13時30分、くもり

♀のオオタカは抱卵していたが、突然別のオオタカが侵入した。付近で見張りをしていたと思われるオオタカ♂が現れた。キッ、キッ、キッと鋭い声を発して追いかける、樹間を縫うように巧みに飛び回り、2羽のオオタカは視界から消えた。

(7) 5月15日 14時00分、くもり

車両から♀のオオタカが抱卵しているのを確認して離れた。

(8) 5月24日 12時00分から13時00分、くもり一時雨

抱卵中のオオタカ♀は腰高の姿勢で巣の中を見守っている。ヒナが生れているようだった。

このころ、周囲の木々は新緑の衣をまとい始めていた。

(9) 5月31日 11時30分から14時40分、くもり一時雨

オオタカ♀がヒナに餌をくちばしで小さく切り与えている。餌は不明だった。私がブラインドに入るのに気付いた♀はケッ、ケッ、ケッと警戒鳴きをしていた。♂はこの警戒鳴きを聞きつけたのか、どこからか飛来し、巣の上に緑の葉がついた小枝を置いていく。少しでも巣を隠そうとする動作と思う。

(10) 6月1日 10時30分から14時00分、晴れ一時くもり

営巣木であるヤチダモの枝は緑に包まれて見通しが十分でない。巣の中に白いうぶ毛に包まれたヒナ2羽が見える。まだ何羽いるか確認できない。♂が♀にネズミを捕らえてきて渡した。(10時50分と12時20分の2回。) ♀はネズミをくちばしで小さく切りヒナに与えている。

林の中からエゾセンニュウのかん高いさえずりが聞こえる。

(11) 6月8日 9時30分から13時00分、くもり

親が9時30分と11時55分に餌を運んできた。ヒナはクイー、クイーと鳴いて餌をねだっていた。ヒナは4羽いることが確認できた。うち1羽がお尻を巣の外にむけ白い牛乳状の糞を放出した。親は巣の上に5分ぐらいいたが飛び立って50m先の木の枝に止った。巣のヒナたちを見守っている。特徴から♀だった。

(12) 6月23日 14時15分から15時30分、晴れときどきくもり

ヒナは大きく成長し茶色の羽毛になったが、成鳥の遅れたヒナ1羽は頭の上部とのどに白いぶ毛が残っている。14時30分、♀は餌を運んできた。5分ぐらい巣の上にいるヒナを見守ったあと飛び去った。

林の中からカッコウ、カワラヒワのさえずる声が聞こえる。

(13) 7月4日 10時00分から11時30分、くもり

オオタカのヒナは巣立ちしていた。1羽のヒナは巣から5m離れたヤチダモの枝に止っていた。一番成長の遅れていたヒナは巣の中にいた。他の2羽のヒナは姿が見えないがこの近くにいます。巣から近いヤチダモの枝に止っていたヒナは、巣のある枝に飛び移ったりしていた。

(14) 抱卵日数は36日から38日と言われているが、私が抱卵を確認したのは4月21日で、ヒナが生れた動向を確認したのは5月24日であるから、34日目までヒナが生れたものではなく、抱卵初日は数日早かったと思う。巣立ちまでの日数は、41日から43日と言われているが、ヒナが生れた動向を確認したのは5月24日で、巣立ちを確認したのは7月4日であるから、42日目まで巣立ちを見た。

(15) アンケート調査資料から見ると、巣立ちの時期は静岡、埼玉、北海道の順に早く、地域によって異なっている。

2 全国及び北海道のオオタカ分布（アンケート資料から）

1993年から1995年におけるオオタカの生息、繁殖が確認された市町村

(1) 全国

生息確認市町村数	761
繁殖確認市町村数	182
確認営巣地数	189

(2) うち北海道

生息確認市町村数	27
繁殖確認市町村数	7
確認営巣地数	12

（空知支庁、上川支庁、十勝支庁、石狩支庁で繁殖

が確認されており、根室支庁、網走支庁から冬期の生息が確認された。）

(3) 営巣地の分布は九州、四国、中国地域に少なく、近畿以北に偏り、太平洋側に多かったことが資料から見る事ができる。

オオタカの全国的な個体数を推計することはこの調査では困難であったが、繁殖確認が182市町村、189箇所であったことから、1984年日本野鳥の会研究センターが推定した300~480羽よりは多いと推察された。

3 保護上の問題点として思うこと

(1) 1996年、観察していた防風林北側で開発工事が始まり、工事用やぐらが設置された。このやぐらは営巣木を見下ろすことになり、環境悪化が主たる原因とは思いますが、オオタカは営巣しなかった。

オオタカは希少野生動物であり、生息地の保秘を重く見ている。公開か、非公開かはケース・バイ・ケースで私としては難しいことだと思っている。ただ言えることとして、営巣地で開発計画があったことを察知できなかったことが残念である。

(2) オオタカを保護する上から、その生息の現状を的確に把握することが重要である。

この調査終了後に鳥仲間から1993年から1995年まで3年間、江別市野幌森林公園でオオタカの営巣を確認したという情報があった。また1995年江別市野幌のカラマツ林でオオタカが営巣したという情報もあった。1996年この野幌カラマツ林の営巣地を案内してもらい観察し、住宅街から50m先カラマツにトビ大の巣を確認したが、オオタカはこの年営巣していなかった。

このような情報を把握して、的確な保護対策をたてる事が重要と思った。

(3) オオタカの保護を進める上で、私が今まで3例（上川郡鷹栖町カラマツ林、手稲区前田防風林、江別市野幌カラマツ林）のオオタカ営巣地を見てきたが、住宅、道路に近い里山であった。日本野鳥の会では「里山の自然と鳥を守る」ことを重点保護事業としており、里山の自然を守ることが、オオタカの保護につながることを改めて感じた。

「アンケート調査によるオオタカの分布と生息」1996年日本野鳥の会研究センター、日本オオタカネットワーク作成資料を、一部抜粋または引用させていただきます。「日本のワシカ類」文一総合出版、「レッドデータアニマルズ」JICC（ジック）出版局、「日本産鳥類図鑑」東海大学出版会など参照。

〒003-0021 札幌市白石区栄通16丁目4-13



小樽探鳥会

9. 12. 14

日本野鳥の会小樽支部との合同探鳥会です。

〔記録された鳥〕 ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、ハヤブサ、コガモ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ケイマフリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上24種

〔参加者〕 小樽支部から39名。武沢和義・佐知子、樋口孝城・陽子、戸津高保・以知子、鈴木繁雄・英子、中正憲徳・弘子、渋谷信六・弘子、田中真理・志司子、森田新一郎、小堀煌治、村上トヨ、広木朋子、大町欽子、高辻弘美、本間 馨、久保友美、遠藤いく子、伊藤恭子、三浦美重子、板田孝弘、小須田秀子、五十嵐美保、木村正道、石橋和子、江尻真喜子、山本昌子、中嶋慶子、橋爪陽子、田中志司子、松本美智子、伊藤聖子、山本やす子、佐藤ひろみ、高栗 勇、羽田恭子、道場 優、栗林宏三、白澤昌彦、河崎国広、山下 茂、山田良造、木村与吉 以上87名

〔担当幹事〕 白澤昌彦、佐藤ひろみ、道場 優、梅木賢俊、渡辺俊夫

藤の沢白鳥園探鳥会

10. 1. 18 久保田 公 子

北海道野鳥愛護会の新年探鳥会はいにく湿った雪の降る日でしたが、沢山の方が集い盛会でした。

私は非会員として始めて藤の沢白鳥園に参加させてもらい今回が新年会であることも知らず、バスの中で一緒にいた皆さんが「豚汁が」などと言われているのを聞きながら、「ウム？」探鳥会に豚汁??よくわからぬまま観察小屋へ到着いたしました。

暖かい観察小屋の中で窓ごしにエサ台や木々に止まる野鳥達を観察し、「ことりの村」の鳥や花などの資料や展示物を見学し近くの藤の沢小学校へ案内していただき、小屋へ戻ると心のこもった豚汁を頂戴しながら昼食をとる。なんとぜいたくな探鳥会なのでしょう。芯から体が暖まりました。

幹事さんのお話の中にもありましたが、奇しくもこの日の朝刊(道新)にこちらの白鳥園の小沢ユキさんが、

92才の高齢にもかかわらず、3年前に亡くなられたご主人様の遺志を継ぎこの観察小屋を開放して下さいにしようという記事が掲載されておりました。小沢ユキさんに感謝しながら楽しませていただいた一日でした。ユキおばあちゃん、お漬物も大変美味でした。

この冬はどちらの探鳥地でも鳥の数、種類が少ないと聞いておりましたが、今回もやはり多くはありませんでした。しかし間近にしてシメ、カケス、アカゲラ、カラ類がじっくりと観察でき個々の美しさに感動いたしました。

冬のみならずぜひ春にもこの「ことりの村」へ、探鳥させてもらいたいと思っております。

お世話下さいました幹事の皆さんに、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

〒011-0035 札幌市北区北35条西6丁目1-1-507

〔記録された鳥〕 アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラス、シメ、以上11種

〔参加者〕 中正憲徳・弘子、樋口孝城、森田新一郎、今野 弘、井上公雄、板田孝弘、岡部誠一・美恵子、西本肇・文子、早坂泰夫、滝本捷一、阿部礼子、広木朋子、原橋 進・玲子、太田 清、犬飼 弘、野口正男、久田伸一、安真一郎、戸津高保・以知子、大町欽子、石井厚子、矢野玲子、横井澄子、鈴木繁雄・英子、栗沢好恵、菅沼良三・郁子、久保田公子、後藤義民、松原寛直・敏子、今泉秀吉、村上トヨ、山本昌子、亀井厚子、蒲澤鉄太郎・則子、大房修平、住吉直子、小堀煌治、佐々木裕・政子、渡辺吉栄、渡辺好子、川崎悦子、白澤昌彦、宮田豊・郁子、清水朋子、鹿島憬策・土婦子、西本みちえ、以上58名

〔担当幹事〕 小堀煌治、早坂泰夫、矢野玲子

私の“森”利用法

— 野幌森林公園 —

10. 2. 8 今 善三郎

一年を森の中で暮らしていたアイヌの人々に真似て、何かを見つけないと思います。私にとっては森は学校であり、樹木や草花は先生であり教科書です。

また私にとって森は健康づくりの場であり、木々は医者だと思っています。暇があれば近くのフォレストウォッチングに出かけています。冬は歩くスキーで動き回り、双眼鏡、ルーペ等は手放せません。出かける時は目的をもって行きます。ただなんとなく、という時も何か発見があるものです。それが楽しくて30分でも1時間でも時間があれば出かけます。

植物や鳥、小動物の名前を覚えたら次にそれらの性質

を学び、どうしてこうなのか推理して行くと人の歴史を更に学ばなければなりません。森での疑問を図書館で確認をするといった具合です。これは楽しいのです。

温帯系植物のクリの木はどうして栗沢、栗山が北限なのかを考えてみると、縄文期の人の動きを推理できます。

ドングリは川の流れてによって伝播されると本に書いてありますが、最初はどうだったのか、どうしてここに生えたのか、カケスやカラス等が運んだものか、否、人が持ち込んだのだ、などの推理は楽しいものです。人の手によって広まったのではないかと推測される植物は以外に多いと思います。自然の状態では考えられないものを、その場所に見つけたときは感動します。まだだれも立証していないのですが楽しみながら野山を歩く日々はこれ

からも続くと思います。

〒061-1141 北広島市青葉町3丁目5-3

【記録された鳥】コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、マヒワ、ウソ、カケス、ハシブトガラス 以上16種

【参加者】道場 優、今 善三郎、村上トヨ、永島トキ江、勝俣征也・由美子、野坂英三、戸津高保・以知子、中正弘子、山川美香、小出弘之、斉藤正雄、佐々木 裕、後藤義民、鈴木茂雄・英子 以上17名

【担当幹事】野坂英三、戸津高保

【野幌森林公園】



所々の残雪に冬の眠りから覚めた裸林の見通しが、鳥たちの活動を見やすく演出してくれます。4月はツグミ、マヒワ、アトリも見られます。5月になるとオオルリが姿を見せはじめ、アオジも囀り、カラ・キツキ類の留鳥たちの繁殖活動も一層活発になり、囀りドラミングと活気に溢れます。松川の池、大沢の池ではカイツブリ、オシドリが見られるのもこの頃です。

日 時=平成10年4月12日(日)

平成10年5月3日(日)

集 合=午前9時 大沢口駐車場入口

【宮島沼】平成10年4月19日

毎年繰り返されるマガンの大集結、その中にハクガン、カリガネ、シジュウカラガン等を探すのも興味深いもので、他にオオハクチョウ、ヒシクイ、ミコアイサ、カイツブリ、夏鳥のノビタキ、オオジュリン、アオジ等も姿を見せ始めます。誘い合わせ、一人でも多く参加しましょう。

集 合=午前10時 大富会館前

交 通=中央バス岩見沢バスターミナル発(月形行き)
大富農協前下車徒歩10分

【千歳川周辺一泊早朝探鳥会】

人工河川の多くなった近頃、この千歳川岸を探鳥コースとする流域は自然が残っていて、水辺、山野、草原、林縁性の鳥の種類も多彩です。

根強い人気のヤマセミ、カワセミ、溪流の鳥カワガラス、キセキレイ、セグロセキレイ、この時期の山野の代表格オオルリ、キビタキ、センダイムシクイ等40種以上が記録されるところです。探鳥にはベストシーズン、早朝と好条件の揃った、楽しみ多い探鳥会です。

日 時=平成10年5月9・10日(土・日)

9日(土)午後7時から交流会

10日(日)午前4時探鳥開始、午前中解散予定

集 合=午後7時支笏湖ユースホテル

あるいは午後6時にJR千歳駅待合室まで。
マイクロバスが迎えに来ます。

宿 泊=支笏湖ユースホテル 午後7時

千歳市温泉番外地 TEL 0123-25-2311

会 費=4000円程度(宿泊料夕食付)朝食は各自持参
申込制=4月と5月の探鳥会の時に。電話の場合は5月5日迄に011-563-5158 白澤昌彦さん宅へ。

付 記=当日直接参加の方は、孵化場手前の橋の側の園地駐車場からの出発になります。鳥への配慮に心がけ、出来るだけ静かに集合、スタートにご協力下さい。

【鶴川】平成10年5月17日(日)

海岸、河口、干潟、低湿地とシギ・チドリの生活の場が次第に狭くなって来ています。かつてシギ・チドリのメッカと言われた鶴川も環境の変化で種類、数とも少なくなりました。北極圏の繁殖地へ向かう途中立ち寄るチュウシャクシギ、キョウジョシギ、ダイゼン、メダイチドリ等の他ダイサギ、チュウサギ、コサギの観察記録も時々あります。

集 合=JR鶴川駅前 9時40分

交 通=札幌駅前バスターミナル8時発浦河行き道南バス 鶴川農協前下車徒歩5分

【植苗、ウトナイ湖畔】平成10年6月7日(日)

植苗駅前をスタートし、ウトナイ湖北東側に広がる草原がこの日の主なフィールドになります。雑木林の林道までの道路の両側の丘陵林から聞こえてくるセンダイムシク、キビタキ、アオジ、カラ類の囀り、林道に入ると道端の野の花にも気を取られ、ベニマシコやビンズイの

声に耳を傾けながら草原に入ります。早速コヨシキリ、ノビタキたちの囀りの出迎いです。この草原では声姿とも美しいシマアオジ、喉もとが紅色の鮮やかで凛々しい姿のノゴマが関心の的になります。ウトナイ湖ではコブハクチョウの微笑ましい親子の姿を見ることもできます。

集 合＝JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
交 通＝JR千歳線札幌駅発 7時55分発苫小牧行き
植苗着 8時56分

【東米里】平成10年6月14日(日)

かつて原野として野鳥の楽園だったこともありましたが、都市近郊という立地条件から土地の利用が進み、生息環境が失われつつあります。

残された僅かな地を生活の場に使っているオオジシギ、モズ、ノビタキ、コウライキジ、コムクドリ、そして少なくなったカッコウも見られるところです。

集 合＝東米里小学校正門前 8時30分
交 通＝地下鉄菊水駅より市営バス(白7米里線)
東米里小学校前下車

【平和の滝夜の探鳥会】平成10年6月20日(土)

手稲山の登山口から約1.5km程、溪流沿いに登った所

が目的地です。オオルリ、キビタキ、クロツグミ等の声を聞きながら進む中、陽は沈み、辺りは暗くなり、やがてヤマシギが飛び、ヨタカやコノハズクが鳴き始めます。送電線の鉄塔がなければ、深い山の雰囲気を感じる所です。

集 合＝平和の滝駐車場 18時30分
交 通＝地下鉄琴似駅より市営バス(西42西野平和線)
平和の滝入口下車(終点)下車徒歩約20分

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成10年4月5日(日)、5月24日(日)
6月28日(日)

集 合＝大沢口駐車場 午前9時
☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。
☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめ下さい。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記具をお持ち下さい。
☆探鳥会の問い合わせは 011-251-5465
自然保護協会事務所まで。
(月～金曜 10:00～16:00) 時間厳守のこと。



◆総会のご案内

平成9年度の総会を次のとおり開催いたします。多数ご参加ください。

日 時：平成10年4月18日(土)
午後1時30分から
場 所：札幌市市民会館会議室

議 題：平成9年度事業報告、同会計報告
平成10年度事業計画、同予算案、ほか

◆野鳥写真展の開催と写真募集

日 時：平成10年5月12日(火)～24日(日)
場 所：光映堂ギャラリー
札幌市中央区大通西4丁目

上記要項で開催いたします。出展ご希望の方は、写真をご用意ください。また会の主旨により、営巣写真はご遠慮願います。

写真送付は光映堂の青山さん(住所は上記)まで。詳細はTel 011-261-0101 青山さんにお尋ねください。

◆平成9年度会費納入についてお願い

平成9年度の会費を未納の方は郵便振替にて至急、振り込みくださいますようお願いいたします。

◆会報の宛て先、郵便番号等に変更がありましたら、至急、お葉書にて事務所までご連絡ください。

◆新会員のご紹介(敬称略)

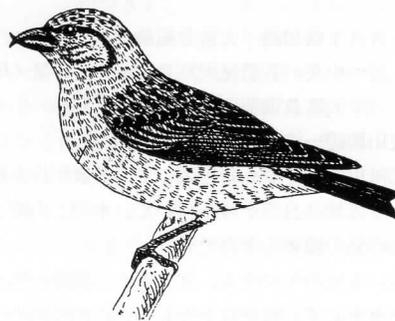
山本昌子 札幌市手稲区宮の沢1条3丁目226-18
溝口恵美 札幌市中央区南9条西4丁目7-1-506
安部様方

◆会員住所変更のお知らせ(敬称略)

三船喜克・幸子 札幌市手稲区前田7条7丁目2-9
広木 朋子 札幌市清田区北野5条1丁目119-7
江島由貴子 東京都多摩市鶴牧5丁目1番地1-507

◆退 会(敬称略)

斉藤春雄、松村昌子、二峰伸勝、山本 一



[北海道野鳥愛護会]年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465